

不満すら出てこない環境

ミルグラムの服従実験

これは、1961年にイェール大学のスタンレー・ミルグラムが行った実験で、閉鎖的な環境において、その場の権威者の命令に従う人間の心理、つまり、どこまで残酷になれるかをシミュレーションしたものです。

被験者には、体罰が学習に与える効果を調べる実験だと伝えられました。被験者は先生役として、生徒役（サクラ）が間違えるたびに電気ショックを与えるよう指示されます。もちろん、生徒役は、実際に電気が流れていないため、苦しんでいるふりをするだけです。実験室には白衣の男性が「権威者」として同席し、どんなに生徒が苦しんでも、実験を続行するように指示します。すると、六割以上の人が「指示通り」に電圧を最大レベル（命の危険がある450V）まで上げるという結果になりました。

この実験で分かったことは、**ごく普通の人も、一定の条件下では権威者の命令に服従し、自己判断を超えて、どんな残酷なことでもやっつけてのけるということ**です。会社の方針だから仕方ない。よく耳にする言葉ですが、私たちは、一体、どこまで会社が「勝手に」決めたこと」に従わなければいけないのでしょうか？

それって思考停止じゃないですか？

この実験の話には続きがあつて、その場を支配している権威者に**対抗する別の権威者がいて、その人が対立する意見を述べたり、同じ立場の被験者が一緒に命令に抵抗してくれたりした場合、服従率が大幅に下がるといことが分かっています。**

会社に対する疑問を口にした際、**「そんなもんだよ」** 何を言っても同じ」といった木で鼻をくくるような回答がよく返ってきます。こうした全体主義的な空気を前に、**「私たちは、たとえどんなに正しい考えを持っていても、自分がおかしいの？」**といった精神状態に陥ります。なぜなら、人間は社会的な動物だからです。反対に、同じ疑問を抱く人間が「私」以外に**いるだけでも、働きやすさ**は変わってきます。**「決定事項には従う」**。しかし、**その「決定事項」の内容そのものに、それを実行するだけの合理性が備わっていないことには、違和感を覚えます。**事実として、守られていない「決まり」の多くは、それが実態に即していない場合がほとんどです。

この実験は、独ナチスのユダヤ人虐殺に深く関与した人物アドルフ・アイヒマンについて検証する目的で行われました。



彼は裁判の場で、「命令に従ったのみ」と一貫して無罪を主張し続けたそうです。



若い力

第 128 号

2019年 11月1日

発責 国労九州本部

博多区博多駅東3丁目9番3号

ニッコーハイツ1003号

JR 092-2075

NTT092-483-1515